

セミナー通信

V o l . 2 6 3

西村セミナールーム

主宰 西村 恵子

次期学習指導要領改定案についての雑感（2）

先月のセミナー通信で、文部科学省の発表した次期学習指導要領改定案に対する私の考えを述べさせていただき、まず過去4年間の当塾新中1塾生の入塾テスト平均点を示させていただきました。それによりますと、国語の平均点には差がないものの、算数は明らかに近年下がってきている状況が見てとれました。その原因がどこにあるのかということをお伝えするために、今月はさらにもう一つの資料を示させていただきます。

入塾テストの結果の集計では、毎年全ての設問に対しその年の受験生の正答率を出しています。以下の3問の正答率の推移をご覧ください。

	三角形の面積	平行四辺形の面積	円の面積（応用）
H17年度	39%	22%	28%
H16年度	40%	40%	20%
H15年度	71%	50%	21%
H14年度	63%	75%	25%

いかがでしょうか。同じ面積問題でも「円の面積（応用）」が実施年度によってほとんど差がないのに比べ、「三角形の面積」と「平行四辺形の面積」は明らかに下がってきているのが見てとれます。これはどういうことを意味するのでしょうか。

もともとこの「円の面積」は応用問題であるため、皆が出来る問題というわけではありません。難しく、数字の示す通り正答率20%台の問題で、4～5人に1人しかできないような問題なのです。H14年度より以前を見ましても同じ様な結果です。これが解けるレベルの子はずっと何年も前から同じ割合で存在し、逆に言えば解けない子も同じ割合で存在していたということです。さらに始めにも書かせていただきましたが、国語の平均点の結果からも察するに、年度による受験生全体の能力差はほとんどなかったはずです。

つまりここから考えられることは、同じ程度の能力であるにもかかわらず、4年前には多くの子が解けていた三角形、平行四辺形の面積問題がだんだん解けなくなってきたということです。ここに算数の平均点の下がってきた原因があります。思考力、読解力は下がっていないのに、なぜ三角形や平行四辺形の面積が求められなくなってきたのか、さらにはそこから見える文部科学省の抜けている視点とは何なのか、さらに来月書かせていただこうと思います。

2回でまとめるつもりでしたが、予定を変更してしまい申し訳ありません。